

「思いやりのある人」

昨日の午前中、金ケ崎にあるムゼウムに行ってきました。ムゼウムと言うのは、命のビザを発行して多くのユダヤ人を助けたという杉原千畝について展示している資料館です。正確に言えば、杉原千畝だけでなく、港町敦賀が人道支援に関わったポーランドの孤児たちの記録も展示されています。

で、なんで私がそこに行っていたのかと言うと、私がお世話になったユダヤ学の先生が見学に来るということを、ムゼウムにお勤めの知り合いに教えて頂いたから、でした。今でこそ、私は牧師をしていますが、大学時代の最初は、ユダヤ学を専攻して、将来は研究者になるんだ、と大学のパンフレットにも載せてもらったくらいなので、まあ、人生は分からないものです。と言うか、なんの罪意識もなく、嘘つきになる可能性ってあるんだなって思います。ちなみに、私と同じタイミングで「イスラーム学を極めて国際機関で働く」とパンフレットに記載された、私の友人も牧師になっています。・・・神様に捕らわれるとは、そういうことだよね、と二人して嘯いたことを思い出します。

話しが逸れました。ムゼウムで昔の恩師の先生に会うことができ、また、そのまま見学案内に便乗させてもらい、私もユダヤ難民のこと、命のビザのことを改めて学ばせてもらいました。

このご時世、つまり、イスラエルが国際社会において、強烈な存在感を示す世相にあって、ユダヤ人やイスラエルの悲劇に心を寄せることは、ともすれば、パレスチナやアラブ世界への反抗と言えるかも知れません。事実、そういう感情から、ただユダヤ人というだけで世界の冷たい目線に耐えかねている人もいるのだそうです。だから、欧米や中東から遠く離れた東洋の日本の、しかもユ

ダヤ人が助けられたことを伝えるムゼウムは、ひそかにユダヤ人たちに人気なのだと思います。

個人的には、国家としてのイスラエルがしていることは、歴史がどうであれ、聖書の記述がどうであれ、多くの犠牲を伴う武力行使であると思っています。だから、国家としての政治的、軍事的戦略には、はっきりと「それは違う」と言いたい。

ただ、イスラエルに住むユダヤ人にしろ、世界各地に住むユダヤ人にしろ、みんながみんな、イスラエル国家と一心同体かと言えば、そうとは限りません。日本には巨大与党があるからと言って、みんながみんな、与党支持とは限らないということと一緒にですね。

ムゼウムを訪れて思ったことは、ユダヤ人とは、大きな力によって虐げられる側にいるにしろ、大きな力によって影響力を及ぼす側にいるにしろ、「ユダヤ人」という大雑把な括りによって、個々人の存在や想いが霞んで見られてしまう、という古代から続く悲しい現実でした。

大学時代に、ユダヤ学の先生から「集合名詞ではなく、固有名詞で考えない」と教わりました。「集合名詞」とは、ユダヤ人、日本人、韓国人、中国人、アメリカ人とかいう国別で括られた名称であり、また、男性、女性、あるいは子ども、大人、高齢者など、肉体的な違いによって区別される名称でもあります。

極論を言うと、この世界には、日本人と言われる人も、男性と言われる人も、大人と言われる人もいません。いるのは、日本人であり、男性であり、大人であるという属性をもつ、例えば、有岡史季という個人です。それは、ここにお集まりの皆さまにとっても、同じです。ここに、女性と言う名の人はおらず、日本人と名付けられた人もいません。いるのは、大切な親御さんから、大切なたった一つの名前をもらった「固有名詞」を持った一人ひとりです。「ユダヤ人」という集合名詞によって長く苦しんできた経験があるからこそ生まれた、「集合名詞ではなく固有名詞で考えなさい」との教えです。

「いかに幸いなことでしょう、弱いものに思いやりのある人は」と、今日の聖書箇所は語り出します。この「弱いもの」と言うのは。確かに集合名詞に区分されます。世界中を探しても、「弱いもの」という名前の人は、多分いないと思います。いたとしても、この聖書箇所が示している人ではないでしょう。でも、私たちは、「弱いもの」という在り方を強いられている、あるいは「弱いもの」に否応なく属している人たちに向けた愛や配慮を忘れないでいたいと思います。

杉原千畝によって、ナチス・ドイツとソビエト連邦から日本敦賀へと逃げ延びたユダヤ人たちは、当時、間違いなく「弱いもの」でした。自力で生存活路を見出せず、馴染みも無かったであろう、日本へ、ほとんど賭け事のような、わずかな可能性を信じて渡ってきたのです。そして、遠路渡って来た敦賀の地にいたのは、異国の逃れ人たちを、温かく迎えた人たちでした。空腹なユダヤ人にリンゴを渡した、お風呂・銭湯を特別に解放した、質入れに応じてお金を工面した、という記録があるそうです。

そういう話を聞いて、私が思い出したのは、旧約聖書にある古い約束の一つです。レビ記 19 章 33～34 節には、こう書いてあります。「寄留者があなたの土地に住んでいるなら、彼を虐げてはならない。あなたたちのもとに寄留するものを、あなたたちのうちの土地に生まれたもの同様に扱い、自分自身のように愛しなさい。なぜなら、あなたたちもエジプトの国においては寄留者であったからである」。もちろん、この旧約聖書レビ記の御言葉を、当時の敦賀の人たちは微塵も知らなかったでしょう。でも、やったことは、この御言葉の通りであると言えます。敦賀の人たちの配慮に触れて、ユダヤ人たちが何を感じたのか、今日の聖書箇所や先ほどのレビ記の一節を思い出したのか、それは分かりません。それこそ、当人たちにインタビューして聞くしかないでしょう。でも、聖書が伝えるエジプトでの寄留者としての経験と、敦賀における逃げ延びた寄留者としての経験を重ねる人も、きっといたんじゃないかと想像します。旧約聖書を学ぶ身としては、そういう聖書の伝承

の先にあるユダヤ人たちの経験について追跡研究する学問もあって欲しいな、とも思います。

旧約聖書を受け継ぐ、つまり、今日の聖書箇所の御言葉を継承する、私たちキリスト者は、「いかに幸いなことでしょう、弱いものに思いやりのある人は。災いのふりかかる時、主はその人を逃れさせてくださる」という御言葉を信じて、歩んでいるのでしょうか。「思いやり」が主の御旨に適い、災いや試練を逃れさせることに繋がると。どれだけ信じているのでしょうか。そして、それが自分事としてだけではなくて、どれだけの人を困難から救う力を持っているのか、弁えているのでしょうか。

杉原千畝の「思いやり」……。もっとも、そこには高度な政治的判断や、感情論とは別の理屈があったかも知れません。でも、外交官として冷徹にはなり切れず、目の前の人を見捨てられなかった思いが、きっとあったんじゃないかと思います。それが、6000 人の命を繋いだとすれば、やはり「思いやり」の効力は絶大と言えるでしょう。

じゃあ、ということで、私たちが「思いやり」を発揮して、6000 人を救えるかと言えば、もちろん、そういうことは無理ですね。でも、隣にいる一人を笑顔に出来たら、それでもいいじゃないですか。笑顔までいかなくても、ホッとさせるくらいでもいいでしょう。少なくとも「思いやり」が無力ではなくて、それは周りの人と、そして自分を幸いにさせる力があることを、今一度、再確認したいと思います。

この詩編 41 編を歌い上げた詩人は、伝統的にはダビデ王と言われています。1 節に書いてある通りです。ダビデ王は、その立場上、色々な苦労や心労があったのだらうと思います。ダビデ王は、もともと羊飼という平凡な家庭の出であること踏まえると、なおのこと国王としての責務に疲弊していたことは理解できます。ダビデ王が病に伏している時、7 節にあるように「見舞にすれば、むなしいことをいいますが、心に悪意を満たし、外に出れば、それを口にします」とは、非常にリアルな、現実感のある訴えです。当事者の前では、社交辞令で上辺の良いことを言いつつ、見えな

いところでは悪態をついてバカにするという。

そういう現実的な悪意に晒される中で、ダビデは、「思いやりのある人」の尊さと、その人に注がれる神様の特別な祝福があることを知るのです。そして、「もしも、私自身が『思いやりのある人』たり得るなら」という願いのもとで、11 節から 14 節のクライマックスへと至ります。「もしも、私自身が『思いやりのある人』たり得るなら」・・・「主よ、どうかわたしを憐れみ、再びわたしを起き上がらせてください。そうしてくだされば、彼らを見返すことができます。そしてわたしは知るでしょう、わたしはあなたの御旨にかなうのだと。敵がわたしに対して勝ち誇ることはない。どうか、無垢なわたしを支え、とこしえに、御前に立たせてください。主をたたえよ、イスラエルの神を。世々としえに。アーメン、アーメン」と。思いやりのある人になれるなら、神様の特別な祝福を、ダビデ自身も受け取ることができると確信して、そう歌っているわけです。とくに注目したいのは、「どうか、無垢なわたしを支え」というところ。「無垢」という言葉は、罪を知らない純真無垢という意味で捉えがちですが、聖書の文脈において、そもそも人間は誰しもと何らかの過ちを犯す存在であり、残念ながら、そういう罪がないという意味での無垢ではられません。ここでいう無垢とは「どこまで神様に信頼を置き、誠実に祈り、奉仕する」ということを意味しています。つまり、自分に過ちがあるか、どうか。今まで相応しい歩みができたか、どうか。という過去の評価によって、判断されるのではなく、今、私が神様に対して、どういう心構えでいるのか、これから神様とどういう関係を築いていきたいのか。そういう未来に向けた信仰が重要であることを伝えています。

なかなか「思いやり」が見つかりづらい世の中かも知れません。と言っても、それは現代特有の課題ではなんく、きっと今までもそうだったのでしょ。だから、聖書はことさらに「いかに幸いなことでしょう、弱いものに思いやりのある人は」と告げています。昔から「思いやりのある人」

はレアな存在であったのだと思います。神様の御旨に従って、他者への配慮と、自分への幸福を諦めない、そんな「思いやりのある人」に、私たちもなれたらいいなあ、と願います。杉原千畝の「思いやり」によって救われたユダヤ人たちを知る私たちですから、そこに神様の祝福と、大きな救いがもたらされることを信じて、思いやりを、隣人愛を忘れない歩みを続けて参りましょう。お祈りを致します。

神様。今日も私たちを愛し、この礼拝堂へと招いてくださり、感謝致します。あなたは、あなたに倣って隣人を愛し、思いやりを傾ける人に特別な祝福を注いで、聖別してくださる方であります。どうか、そのことを私たちが弁えて、この社会における「思いやりのある人」として歩んでゆくことができますように。支え、導いてください。光のないところの世の光として、喜びを失っているところの地の塩として、十分に私たちを用いてください。キリストの肢であらうとする私たちによって、あなたの栄光がより一層確かなものとなりますように。

このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。